

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20730332

研究課題名（和文）

「学生運動世代」のライフコースに関する日独比較研究

研究課題名（英文）

Comparative Research on Life Courses of Japanese and German '68 Generations

研究代表者

青木 聡子 (AOKI SOKO)

名古屋大学・環境学研究科・講師

研究者番号：80431485

研究成果の概要（和文）：

本研究では、1960年代後半の学生運動の時代に青年期を過ごした日独の「学生運動世代」のライフストーリーの分析から、彼らが1970年代以降の日独社会の政治環境とりわけ社会運動をとりまく環境の形成に同世代が果たした役割を明らかにすることを目的とした。調査結果の分析からは、日独の学生運動世代が1970年代以降に双方の社会において社会運動の担い手であったという点では共通するものの、担い方やイシューにおいては差異がみられることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

This research project aims at clarifying roles to build up political environments and circumstances of social movement, which have been carried by Japanese and German '68 generations, who had their youth at the end of 1960s. For this purpose, their life histories has been gathered and analyzed. Analyses shows following findings: Japanese and German '68 generations have been played an important role in various social movements after 1970s as they used to be, however their ways of engaging in social movement and main issues have been different in Japan and Germany.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会運動、環境社会学、ライフストーリー

## 1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、研究課題申請時までに、1970年代後半以降ドイツ各地で展開された原子力施設反対運動に関して、担い手団体

「ビュルガーイニシアティヴ」のフレーミングに着目した分析をおこない、抗議行動の参加者および支援者の拡大を促す社会的条件の導出をおこなってきた。その過程で、「学

生運動世代」が当該世代に特有の動機に基づきドイツ各地の原子力施設反対運動において重要な役割を果たしてきたという事実を目の当たりにし、「学生運動世代」の運動参加の仕方と度合いとが社会運動の展開過程に影響を与えるのではないかという仮説をもつに至った。

1960年代後半に青年期を過ごし学生運動という同時代的政治的体験を共有した世代が、特有の政治意識を有し、他の世代と比べて社会運動への参加意欲や関心が高いことは、ドイツ社会だけでなく日本や他の欧米社会にも共通の現象として指摘されてきた。だが、その指摘は一般論として語られるにとどまり、裏づけとなる本格的な実証研究はほとんどおこなわれてこなかった。1970年代以降右傾化した学生運動経験者も少なくないなかで、「学生運動世代」の政治的社会化の実態は明らかになっていない。学生運動がその後の政治や社会運動をめぐる環境に影響を与えたといわれるものの、いかなる影響がどの程度あったのか、不明確なままである。

こうした状況を受けて、本研究代表者は、日独の「学生運動世代」を対象としたライフコース分析を通じて彼らの政治的社会化過程を導出し、1970年代以降、日独でみられた政治や社会運動をめぐる環境の変化との関係を導出するという主題を着想するに至った。

## 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では、1960年代後半の学生運動の時代に青年期を過ごした日独の「学生運動世代」の政治的社会化過程を比較分析し、1970年代以降の日独社会の政治環境の形成に同世代が果たした役割を明らかにすることを目的と設定した。

## 3. 研究の方法

本研究では、当初、日独の「学生運動世代」と非「学生運動世代」を主な対象として、量的アプローチと質的アプローチとの双方を用いて分析を進める予定であった。しかし、量

的調査の際のサンプリングに使用を予定していた名簿の公開が不可とされたため、当初の計画を大幅に変更し、ライフヒストリーの聞き取り調査によって質的なデータを中心に収集することとした。聞き取り調査の対象としたのは、日独で現在社会運動に従事している人々（学生運動世代および非学生運動世代）である。スノーボールサンプリングにより聞き取り相手を拡大していった。聞き取り調査は2008年5月～2012年3月にかけておこなった。

## 4. 研究成果

本研究のライフヒストリー調査対象者は、日本で60名、ドイツで88名であったが、それぞれの年齢別・男女別内訳は下の表のとおりである。

表1 調査対象者の属性（日本） 単位：人

	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	合計
男	0	2	1	6	11	14	5	39
女	0	0	1	6	6	7	1	21

表2 調査対象者の属性（ドイツ） 単位：人

	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	合計
男	1	4	5	5	6	21	13	55
女	1	3	2	2	6	11	8	33

また、学生運動世代か否かで分類した結果は、日独それぞれ、下の表のとおりである。ここでいう「学生運動世代」とは、1968年から1969年にかけて18歳～22歳であった人々、すわわち、1946年～1951年生まれの人々を指す。

表3 学生運動世代か否かの分類（日本）

	学生運動世代	非学生運動世代
男	13	26
女	5	16

表4 学生運動世代か否かの分類（ドイツ）

	学生運動世代	非学生運動世代
男	26	29
女	10	23

これらの対象者から得られた聞き取り調査結果を分析し明らかになったのは以下の三点である。

第一に、本研究でライフヒストリーの聞き

取り調査をおこなった、日独の社会運動・NPO/NGO 活動に従事者を、従事する社会運動・NPO/NGO 活動の 이슈ごとに分類すると、学生運動世代・非学生運動世代それぞれ下の表のとおりであった。なお、複数の活動に従事している人や、かつて従事していた活動と現在従事している活動が異なる人については、現在もっとも時間を割いている活動をカウントしている。

表 5 社会運動・NPO/NGO 活動 이슈  
(日本) 単位: 人

	学生運動世代	非学生運動世代
反/脱原発	5	6
公害問題	8	7
再生可能エネルギー	2	5
野生生物保護	2	10
森林保全	0	4
反グローバルリズム	0	7
その他	1	3

表 6 社会運動・NPO/NGO 活動 이슈  
(ドイツ) 単位: 人

	学生運動世代	非学生運動世代
反/脱原発	16	12
公害問題	2	0
再生可能エネルギー	12	18
野生生物保護	4	4
森林保全	1	3
反グローバルリズム	0	12
その他	1	3

日独ともに、反グローバルリズム運動については、学生運動世代の従事はみられず、非学生運動世代、とりわけ 20 歳未満・20 歳代・30 歳代という若い年代に従事者が偏った。日本では、学生運動世代 18 名のうち、反/脱原発運動や公害問題といった対抗的な運動に従事する人々が 13 名、再生可能エネルギーや野生生物保護や森林保全などの NPO 活動に従事する人々が 5 名であり、学生運動世代が対抗的な運動に従事する傾向がみられた。反対に、非学生運動世代は非対抗的な活動に従事する傾向がみられた。これに対してドイツでは、学生運動世代が対抗的運動・非対抗的活動の双方に従事していることがわかった。とりわけ、再生可能エネルギーに関する活動に従事する学生運動世代が日本に比べて多くなっているが、これは、かつて反原発運動に

従事していた人々が当初の目標（原発建設阻止など）を達成したのちに活動の重点を再生可能エネルギー事業の導入・普及へと移行させたためである。

第二に、日独の学生運動世代にみられる学生運動に対する意味付けの違いである。聞き取り調査の際、日本の学生運動世代は、学生運動の過去について言及する頻度や時間が、ドイツの学生運動世代に比べて少なく、言及する際も否定的なニュアンスで語る傾向がみられた。現在の活動と学生運動当時の経験とが関連付けて語られることもほとんどなかった（ただし学生運動世代としての責任についての言及が例外的に 2 名あった）。これに対してドイツでは、学生運動世代への聞き取り調査において、対抗的な運動に従事している人々を中心に、学生運動世代としての責任に言及する語りが聞かれた（14 名）。それら語りの内容は共通しており、いずれも、①ナチスの台頭を許した親世代を学生運動当時に糾弾した世代であるということ、②だからこそ自らは不正義と思われる状況に直面したさいに行動を起こさなければいけないと自覚しているということであった。この意識は、学生運動の際にキャンパスや路上での直接行動に参加したことがない学生運動世代からも聞かれた。その一方で、ドイツの学生運動世代のうち、再生可能エネルギーなど非対抗的な運動へと活動の重点を移行させた人々からは、学生運動当時の自らを「あまり熱心ではなかった」と評価する傾向もみられた。「熱心ではない」とは、過激派からは距離を置いていたことや彼らの活動を否定的にみていたことを意味している。このような語りは、とりわけ自然科学を専攻する学生だった人々から多く聞かれた。

第三に、ドイツにおいては、世代責任の意識が強いことである。学生運動世代の「行動するわれわれ」という世代意識が下の世代に受け継がれており、各世代において「良き社会を次の世代に継承する責任」が意識され、そのためには不正義に対しては異議申し立てをおこなう「義務」があるというのが、対抗的な運動（反グローバルリズム運動を含む）に従事する 10 歳代～50 歳代の人々に共通してみられた運動への意味付けであった。ただしその際に、「良き社会」の「社会」の範囲はバリエーションがあり、具体的に自らが居住する地域社会（自治体レベル）からグローバルレベルまで、さらには抽象的な市民社会まで人によってさまざまであった。

以上から、本研究においては、日独の学生運動世代が 1970 年代以降に双方の社会において社会運動の担い手であったという点では共通するものの、担い方においては差異がみられることが明らかになった。日本においては、反/脱原発や公害問題など対抗的な運

動に従事し続ける学生運動世代が多くみられたのに対し、ドイツでは、そのような人々に加えて、対抗的な運動から非対抗的な運動へと活動をシフトさせてきた学生運動世代も一定数みられた。活動をシフトさせた人々のおもな理由としては、まず、もともと取り組んでいた特定の原発立地反対運動や環境悪化への対応などが、目標達成というかたちで終結を迎えたことが挙げられるが、個別目標が達成されたあとも、他の立地点の反対運動に従事し続ける人々もいるなかで、再生可能エネルギーなどの運動へと移行したのは、学生運動世代の自分を「あまり熱心ではなかった」と振り返る人々であった。このような、いわゆる現実路線派ともいえる学生運動世代が、ローカルレベルでは地元の 이슈に取り組み続けてローカルガバナンスの担い手となり、ナショナルレベルでは、1998年の社会民主党と緑の党の左派連立政権に寄与したと考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 青木聡子、ドイツにおける原子力施設反対運動の今日展開：キャスク輸送をめぐる抗議行動の事例から、ドイツ研究、査読無、第46号、2012、85-102
- ② 青木聡子、公害経験地域に残された問題と当事主体の取り組み、名古屋社会学論集、査読無、第30号、2009、101-122

[学会発表] (計5件)

- ① 青木聡子、ドイツにおける原子力施設反対運動の今日的展開：「抗議のコミュニケーション」の視点から、環境社会学会第44回大会、2011年12月11日、関西学院大学(西宮上の原キャンパス)
- ② 青木聡子・中川武夫、公害経験地域に残された課題と当事主体の取り組み、東海社会学会第3回研究例会、2010年3月5日、金城学院大学

[図書] (計2件)

- ① 青木聡子、「環境社会学——自然環境と人間社会との相互作用を考える」『社会環境学の世界』(竹内恒夫ほか編)、日本評論社、2010、163-181

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

無し

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木聡子 (AOKI SOKO)  
名古屋大学・環境学研究科・講師  
研究者番号：80431485

(2) 研究分担者

研究分担者なし

(3) 連携研究者

連携研究者なし

